

センター便り

江戸川区口腔保健センター

〒134-0013 東京都江戸川区江戸川5-14-4 Tel/03-5667-8020 Fax/03-5667-8022

Newsletter



いよいよ超高齢社会、より多くのニーズに応えるために

公益社団法人東京都江戸川区歯科医師会副会長 岡本和久



平成16年の開所以来、江戸川区口腔保健センターは特別な対応が必要な障害児・有病高齢者に、より安心で安全な歯科診療を行うだけでなく、歯科に求められる特別なニーズに応える多くの事業や啓蒙活動も行ってきました。

患者数だけでなくその他の利用者数も増え、事業拡大によりスタッフ、関係機関も増え、また、必要に応じて行政の方も加わり、連携できる体制作りで職員、委員会が一緒になって考えています。

口腔保健センターの事業は行政と行う必要のある特殊な分野で、特別な技能の必要なことが多いのですが、変化する歯科ニーズへの対応をリードしている面もあります。

特に、これからの歯科を担って行く若い先生には良い研鑽を積む機会にもなります。口腔保健センターの事業はいろいろあり、是非とも参加して協力頂き、新しい考えを取り入れ発展して欲しいと思っています。是非よろしくお願いします。

第28回摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会に参加して

口腔保健センター運営実施委員会副委員長 福田喜則



令和4年9月23日(金)、24日(土)、千葉県千葉市にある、幕張メッセの現地開催とオンデマンドでのハイブリッド開催にて第28回摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会が執り行われた。江戸川区歯科医師会会員からは、岡本和久副会長、清水畑倫子口腔保健センター担当理事、竹内陽平同副委員長、橋本かほる先生、私と計6名で参加した。同学会は医療関係から栄養調理等多岐にわたる内容を包括しているため、会員数が16,000人を超え参加者も約7,000人となるマンモス学会に成長をしている。大会長は国際医療福祉大学成田保健医療学部言語聴覚科の倉智雅子先生。会員数もさることながら、近年の社会情勢や高齢化に伴いこの

分野での歯科医師のなすべき仕事は多い事がわかる。同学会理事長経験者の多くは歯科医師である。このような医療福祉全てが関わる巨大な

学会で歯科医師が理事長を務めることはまれであり、この分野での歯科医師の活躍の歴史を感じる。口腔保健センター運営委員会では、同学会の「摂食嚥下認定士」の取得を目的とした勉強会も会館で行っている。



ぜひ興味のある方はふるって参加してほしい。

さて、当日の会場の方であるが、スペシャルゲストでチーバ君とうなりくんが来ていた。多くの会場で人



があふれ、熱気がすごい。ゆっくり行って座れる会場など少なく皆並んで次の聞きたい講演を待つ。コロナ禍ということでランチョンセミナーは無いが、

託児室は設けられていて子ども家庭に優しい。最も広い会場には企業展示ブースが所狭しと設営され100社を超える。吉野家の介護食など聞いたことのある企業が多く、サンプルは大盤振る舞いに配られていた。キッチンカーも出動してお昼も楽しめた。歯科関係の学会では見たことのないこの光景は、日本の高齢化と介護業界の切羽詰まった状況を垣間見れた気がする。

土曜に終わる学会だったので私は個人的に日曜まで泊まりたかったが、台風の季節。また、近場ということもあり早々に退散したが、とても素晴らしい学会参加だった。

第50回日本歯科麻酔学会総会・学術集会 報告



口腔保健センター運営実施委員会委員 小野寺隆昭

第50回日本歯科麻酔学会総会・学術集会が令和4年10月27日(木)から10月29日(土)まで昭和大学上条記念館にて行われました。今回の大会テーマが「歯科麻酔専門医の活動の場を広げよう」との事でした。現状として歯科麻酔管理は病院を中心で行われており、歯科麻酔専門医の半数は一般診療を行なっております。また、歯科における全身麻酔の相当数は医科麻酔科医が行なっております。

その背景として、社会の中で歯科麻酔医の存在や静脈内鎮静法という治療法が認知されていない事が大きいと思われます。そのため本学会では病院歯科や障害者歯科治療、一般診療においてどのような歯科麻酔医の役割があるかに関する特別講演、シンポジウムが多く見られました。

特に当センターの非常勤指導医の中村全宏先生が座長を務めた「障害者歯科治療での安全な全身管理」で口腔保健センターにおける全身麻酔、静脈内鎮静法の実施割合(静脈内鎮静法を行わないのは35%、全身麻酔法を行わないのは68%)、日本の高齢化社会や

医療技術の進歩に伴い障害者も高齢化する中で歯科麻酔医と障害者歯科治療従事者との連携の重要性、歯科麻酔医も一般歯科医としての歯科知識、摂食嚥下の知識が重要になってくると認識しました。

また、私個人としては新しい全身麻酔薬「レミゾラム」の演題が多く見られた事が興味深かったです。全身麻酔の導入および維持に用いることができる催眠鎮静薬として2020年8月にレミゾラム(製品名: アネレム)が新たに登場しました。全身麻酔を適応として承認されたのはわが国が世界で初めてです。特徴として麻酔からの覚醒が早く、循環動態の安定性が高いことから今後歯科における全身麻酔や静脈内鎮静法に多く使用される可能性が高いのではないかと考えております。

口腔保健センターでは一般診療所では治療が難しい有病者、障害者などに対応していくためにもより一層の知識の習得が必要であると本大会を通じて実感致しました。

第39回日本障害者歯科学会学術大会 報告



口腔保健センター運営実施委員会委員長 金栗勝仁

第39回日本障害者歯科学会学術大会が11月4日(金)から11月6日(日)まで倉敷市民会館、倉敷アイビースクエアの2か所で行われました。今回は3年ぶりにWebと現地開催でしたが、2,700人と大勢の方が参加されていました。この学会は医療実態、地域医療、麻酔、障害者治療の症例報告、口腔ケアの取り組みなど多岐にわたり、大学関係者以外に、各地域の歯科医師会、口腔保健センターから多数発表がなされています。他地区の先生方と意見交換でき有意義な学会となっています。



今回の大会のテーマは「『いきる』を支援する歯科医療—地域医療と福祉の連携—」となっていました。「いきる」という表現は、障がい者を有する方が「生き生き」と「生きがい」を持って、生活していただきたいとの願いを込めています。障がいのある方は、福祉の制度を利用して生活していることが多く、障害者歯科はその制度との連携が強く求められます。しかし、地域の歯科医療機関では福祉の情報が少なく、連携の方

法がよくわからないのが現状です。歯科医療従事者にとって、障がいのある方の日常を支える福祉への共感と理解は必須です。障害者福祉と医療の架け橋となるよう企画されたようです。

江戸川区歯科医師会からは中島会長、岡本副会長、口腔保健センター協力医の8名の先生方が参加しました。金曜日の認定医研修会から参加された先生、土曜日朝から日曜日まで参加された先生など各々の日程で参加されていました。これまではポスター発表での意見交換を行うことがありましたが、一般公演はWeb



による動画発表という形式をとっていました。教育公演は数多くあり、「地域医療と福祉の連携」について学び、合間に倉敷観光も堪能してまいりました。また、帰宅後オンデマンド

配信でゆっくり講演を視聴でき便利な世の中になりました。来年は札幌で開催されるようです。皆様多数ご参加よろしくお願い致します。